

研究・教育活動に関する受賞・表彰について

文学部 英文学科 教授 椎名美智

準優勝@「第一回語用論グランプリ」(日本語用論学会主催) 2018年12月2日

<賞の内容>

この賞は、研究・教育そのものに対する学術的評価というよりも、自分の研究についていかに面白く熱のこもったプレゼンテーションをして、分野外の研究者の興味を喚起できるかという点に重点をおいた一種のコンテストにおけるパフォーマンスへの評価です。言語学においてまだ比較的新しい「語用論」という学問分野の認知度を高めようとする学会の初めての試みで、学会の最終日、最終プログラムでありながら、学会内外からこれまでで最高と言えるほどの参加者を集めるイベントとなりました。結果は、聴衆の投票によるものです。一回戦では6人の研究者3人ずつ2リーグに分かれ、3人が研究発表と相互に質疑応答をした後に、投票により1リーグから1人ずつが勝ち残ります。次に、勝ち残った2人が二回戦に進み研究発表をして、再び投票で勝者が決まるといふ、学会には珍しい競技会形式でした。

椎名の発表は、「ポライトネス研究」(一回戦)、「歴史語用論研究」(二回戦)についてのものでした。一回目は「ポライトネス研究」で、W.B. イエーツの詩の一節、夏目漱石の『明暗』のテキスト、日本語の呼称、文体シフトについて、ポライトネス理論、グライスの協調の原理、距離感のストラテジーを使って分析しました。二回目は「歴史語用論研究」で、「させていただく」という授受動詞の補助動詞の用法を取り上げ、アンケート調査とコーパス分析について、自身の最新の研究成果を報告しました。

以下は、学会HPに掲載された記事と写真(赤枠が本人)です。

以下引用

日本語用論学会第21回全国大会で、「第1回 語用論グランプリ！」が開催され、6名の論者が熱い「戦い」を繰り広げました。ファーストステージでは、それぞれ、西田光一さん(新グライス派)、松井智子さん(関連性理論)、井上逸兵さん(社会言語学)、大堀壽夫さん(認知言語学)、椎名美智さん(歴史語用論/ポライトネス)、西阪仰さん(会話分析)が専門分野の観点から興味深いお話をしてくださいました。グループそれぞれのやり取りも和気あいあいとして和やかな雰囲気で行われました。ファイナルステージの結果、オーディエンスのコインによる投票形式で、優勝が井上逸兵さん、準優勝が椎名美智さんに決定しました。複数の視点から語用論にまつわる現象を、超一流の先生方から聞くことができ、大変贅沢なイベントだったという声を多くいただきました。また滝浦真人さんによる軽妙な解説も好評でした。ご登壇の先生方、お集まりいただいた皆様、どうもありがとうございました！

(鍋島 弘治朗)

